

喜劇と悲劇 (五) ———— 三島由紀夫の戯曲

佐々木 徹

Komödie und Tragödie Nr.5. — Eine Tragödie von Yukio Mishima

Toru Sasaki

はじめに

三島由紀夫の場合、昭和四十五年（一九七〇）のあの事件を無視して、その作品を論じるのは無意味のように感じられる。十一月二十五日、楯の会のメンバー四人とともに、東京市ヶ谷陸上自衛隊東部方面総監部に乱入、益田兼利総監を拘束したあと、バルコニーから自衛隊員に向かって演説したが効果なく、森田必勝の介錯で割腹自殺した。ときの総理大臣は「狂気の沙汰」と一蹴したが、そのニュースは世界を駆けめぐり、二十世紀の日本で起こった「武士道」の実践に驚嘆した。

(1) 没後三十五年の節目に当たる二〇〇五年には、三島由紀夫の足

跡を振り返り、あらためてわが日本を検証する試みがいろいろとなされた。自衛隊乱入そのものは政治的には何の影響も与えなかったが、その思想はさまざまな角度から論じられ、とくに平成に入ってから以降の日本人の精神的空虚と荒廃に関して、三島由紀夫が引用されることは多い。

自決する年の七月七日付けの産経新聞夕刊に、三島由紀夫は「わたしの中の二十五年」という原稿を寄せている。そのなかでは、戦後のアメリカ占領政策とみずからの文学的営為を回顧し、最後に「私はこの二十五年間に多くの友を得、多くの友を失った」と書き、山気は十分あるのに、「俗に遊ぶ」境地になれない自分を反省している。そして、「二十五年間に希望を一つ一つ失って、

もはや行き着く先が見えてしまったような今日では、その幾多の希望がいかに空疎で、俗悪で、しかも希望に要したエネルギーがいかに膨大であったかに啞然とする」とのべて、このまま行ったら日本はなくなってしまうのではないかと結論づけている。「日本はなくなつて、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュー・トラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るであろう。」

この予想の大部分は当たっていると云えるが、昨今の、子供が親を殺し親が子供を殺すといった事件の多発を、三島由紀夫はいったいどう見るであろうか。もし生きていたなら、三島由紀夫も齢八十になっている。

本論考では、三島由紀夫のいわば非政治的な時代、昭和三十年代の戯曲をとりあげる。三島由紀夫は詩も小説も物語も書いたが、もっともその本領を発揮したジャンルは、華麗な台詞のちりばめられた演劇ではないかと思われる。そのなかでも代表作の一つとされ、上演回数を重ねてきたのが『鹿鳴館』である。

佐々木 徹

一 母の秘密

戯曲『鹿鳴館』は、昭和三十一年（一九五六）十一月、文学座公演のために書かれた。

時は、明治十九年（一八八六）十一月三日、天長節の一日、午

前十時から夜半まで。「天長節」とは、天皇誕生の祝日、この場合は明治天皇の誕生日をさす。現在の「文化の日」である。

第一幕の舞台は、影山伯爵邸の広い庭内で、障子の開け放たれた茶室が中央にあり、前栽には菊の花、飛石、蹲踞、寛などが見える。

女中頭の草乃に案内されて、大徳寺侯爵夫人とその娘・頸子、宮村陸軍大将夫人、坂崎男爵夫人の四人があらわれる。

折から、日比谷練兵場では観兵式があり、騎兵隊の行進など、男たちの式典がとり行なわれていた。夫人たちは、望遠鏡を使って遠くからその様子を眺め、いろいろと噂をするが、やがてその的は、まだあらわれないこの家の女主人・朝子になる。

影山夫人が、今日の天長節の参賀に行かなかつたこと、鹿鳴館の夜会には決して出席しないこと、もと新橋の芸者だったこと、ダンスも習いドレスもたくさん持っているはずなのに、裾を引いた和服姿を通してることなど……。

そこへ噂どおり、裾長の着物の裾をとって朝子が登場。

「皆様、ようこそ。こんなにお待ちして、お詫びの申し上げようもございません」

という朝子のあいさつを、大徳寺侯爵夫人が受けて、「堅苦しいごあいさつはご無用よ。今ここであなたを何とかして、鹿鳴館の夜会へ引っ張り出す工夫はないものかと、相談していたところでしたの」

「まあ、ご冗談ばかり。私のような旧弊な女が、どうしてあんな

な派手なところへ」

陸軍大将夫人と男爵夫人が辞したあと、朝子は侯爵夫人から折り入って相談があると持ちかけられた。夫人の令嬢・颯子が道ならぬ恋をしているというのである。夫人は、新しい時代にふさわしく、娘には自分の思うように生きてもらいたいと考えているが、颯子の相手は反政府組織・自由党の残党で、夏の終わり、こっそり見に行った曲馬団で偶然知り合い、ひと目で恋に落ちた。その恋人が、昨夜、別れを告げに来たのである。

「何度うかがっても、わけはおっしゃらないの。でも私にはわかりましたの、あの方は今日、何か命を賭けたことをやろうとしていらっしゃるんだって」

その青年は、反政府運動の指導者である清原永之輔の息子・久雄だった。朝子の中を衝撃を走る。二人をどこか遠くへ逃がしてやりたいと願う夫人は、同時にそれが朝子のためにもなると語る。清原永之輔の息子が企てているのは、朝子の夫・影山伯爵の暗殺だったからである。

「ねえ、奥様、その書生さんの命がけのお仕事、男がこうと思ひ込んだら女のことなどは忘れてしまってお仕事、それを私ども女の力で打ち砕かなければなりませんのね」

「そうよ。私も女が力を合わせて、しゃにむに走り出す男の足を、引き戻さなければなりませんわね。男は身を滅ぼすために夢中になります。男が夢中になるものの中でまず当を得ているのは

女だけですわ。ほかのことは下らないことばかり」

男が思い込んだら女のことなど忘れてしまう仕事、身を滅ぼすほどに夢中になる仕事などあるのだろうか。たぶん、昔はいっぱいあったと思われる。忠臣蔵、新撰組、特攻隊……。いのちを賭けた激しい闘いの世界があり、そこには何か大義とか天命と呼ばれるような力が働いていた。そして、いずれの場合も、証明という客観的な手続きとは無関係なところで、決断がなされている。だからこそ、「女の力で打ち砕かなければ」ということにもなる。なぜなら、その「夢中」こそ、家を守り子供を育てる女の敵であるのだから。

大徳寺夫人の手筈で、朝子は久雄に会うことになった。

二人きりになった朝子は、愛する颯子と別れてまで決行しようとする内容を探ねるが、久雄は答えることを拒む。あなたがたぶん殺そうと狙っている影山伯爵は自分の夫だと、朝子が詰め寄っても、久雄は笑って答えない。朝子は、母親に話すようなつもりで、としつこく尋ねる。

「僕には母親なんかありません」

久雄の答えはそっけない。

父は家庭のことなど顧みず、昔からいる乳母たちにまかせ切りだった。五人兄弟のうち、久雄だけが誰か知れない人の子供だった。久雄は台所で育てられた。大きくなるにつれて、父を恨むようになった。父は立派で、理想主義者だが、その家庭は真っ暗闇

で陰惨、人に見せられるものではない。いつか父の理想の鼻を明かしてやりたいと思うようになり、去年、家を出た。

話を聞いた朝子の目から、涙があふれ出る。久雄は二十年前、芸者時代に自分が生んだ息子だった。打ち明けられても、久雄は信じない。

「ではお尋ねしますが、仮定としてですよ、生まれた僕を父にあずけて身をひかれたあとのあなたは、そのあとのあなたはとうとうたんです」

「永いこと、半病人のようになって暮らしました」

「それからあとは？」

「だんだんに諦めました。……私は芸妓だったんですよ」

「それからあとは？」

執拗な久雄の質問は、自分自身の生誕から現在までの時間をたどる。

「ああ、むごいお尋ね！ でもいいの、何でも聞いて下さいましね。それからあとは……だんだんに忘れえました」

「ああ、あなたは正直です。それだけはわかりました」

別れ、諦め、そして忘却。時とともに順を追って、人の心は変わってゆく。変わることが救いになる場合もある。恋に心を奪われているあいだ、時計の針はとまっている。この世から時計という時計を追放してしまいたいのが、いつも変わらぬ恋人たちの願いであろう。しかしそのうち、生活という時計が時を刻みはじめる。結ばれても結ばれなくても、恋の情熱は弱まり、やがて収ま

る。永遠の愛など、存在しない。

生まれたばかりの子供を渡し、みずから身を引いた朝子は、一つの時間を封じこめ、影山伯爵夫人として、もう一つの時間を生きてきたのである。

朝子は、小さいときにつけた久雄の身体の傷についても、具体的に示す。疑いのような事実を突きつけられて、久雄の心は大きく動揺し、そして、決行しようとしていることの真相を明かす。

「僕が今夜、殺そうとしているのは、あなたのご主人じゃありません」

影山が殺害されるものとばかり思っていた朝子はおどろくが、久雄は平然と、

「僕が今夜、暗殺しようとしているのは、僕の父なんです」

二 妻の裏切り

それまで影山伯爵邸の奥深くひそんでいた朝子が、急に行動的になる。とまっていたもう一つの時間が動き出したのである。

女中頭の草乃に頼んで、久雄の父、かつての恋人である清原永之介と会うことにする。暴挙を未然に防ぎ、久雄と清原と顕子、三人のいのちを救うためである。

第二幕は、同じ日の午後一時、やはり同じ影山伯爵邸の茶室の

ある庭園。

「永いご無沙汰をいたしました」

と清原は落ちついた様子であらわれる。朝子のなかに封じこめてきた熱い心がふたたび脈を打ちはじめ。

「本当にお変わりなく。……ちっともお変わりじゃいらっしやいませぬのね。お髪もつやつやと黒くていらっしやるし」

「腰が曲がっているとでもお思いでしたか。おそらく私が年をとらぬとしたら、政府の弾圧のおかげでしょうよ。どこの国でも圧迫されている民衆は、支配者よりも若々しいのを、私もこの目で見て来ました。それにしてもあなたのふしぎな若々しさは、この理論では解けませんなあ」

「あなたのは本当のお若さ、私のはいつわりの若さだからでございます。でも、まるできのうのお目にかかったばかりのような軽口をお叩きになるところも、二十年前のあなたとそっくり。どうしてでございます。私の口からもかるがると言葉が出てまいります。あなたのお目にかかったら、ものも言えまいと思いましたが」

「私たちはいつ何時でも、もう一度昔の時間を生きることができるよう、習練を積んで来たのですな。私たちが会う。するとその時から昔の時間がはじまる」

長い歳月をはさんで、二人の人間が再会する。当然、それぞれの人生には、通りすぎた時間のあとが残っているはずだ。まったく変わらないことはなく、おたがいに若々しいと認めあうために

は、「思ったよりは」という但し書きが必要である。

清原は自分の若さを、政府の弾圧にたいする抵抗と結びつけて説明している。自分の外にある力を取りこみ、バネとして生きる。しかも、清原には「理想」という大義名分があった。朝子の人生もまた、影山伯爵という外なる力との闘いの連続だったが、それは同時に伯爵家を守るという「偽善」の上にある。「あなたのは本当のお若さ、私のはいつわりの若さだからでございます」という朝子の言葉は、そこから発せられている。

話が久雄のことに及び、家出してしまった息子にたいする父親の思いを語るうちに、清原は朝子が無言を隠していることに気づく。

「はっきり申し上げますわ。今夜、あなたのお命は危うくなります」

「え？」

「お信じにはなりませんか。今日、わざわざお越しをねがったのは、あなたをお助けしたからでございます」

「お志はありがたいが、私は危険に生きてきた人間だ。危険が私の日常で、今こうしてお話しているのさえ、私の危険な生活の一部なんだ」

朝子は、今夜の壮士乱入の計画はすでに洩れていること、それを指揮する清原のいのちがねらわれていることを告げる。計画が洩れたことに清原はおどろくが、いったん決めたことに変更はない、いのちも惜しくないと思つておぼえる。

鹿鳴館は外国人たちの笑いものになっている。誰ひとり、日本は文明開化したと見直し尊敬している者はいない。日本の女性たちを芸妓と同じように思い、夜会でのダンスを猿の踊りだと見ている。政府高官のお追従笑いは、条約改正どころか、外国人たちの軽蔑を招いているだけだ。外国人は自尊心を持った人間でなければ、決して尊敬しない。

清原は持論をのべたあと、こうしめくくる。

「壮士の乱入はばかげたことかもしれません。しかし私は、それで政府に冷や水を浴びせかけ、外国人に肝っ玉のすわった日本人もいるぞというところを見せてやれば、それで満足なのだ。抜き身をふりまわすからと言って、お客にかすり傷一つ負わせてはならんと命じてある。若い者たちは劍舞の一つも踊って、威勢よく引き揚げるでしょう」

壮士の乱入をやめさせるために、朝子は言葉を尽くし、手をつき頭をさげて頼むが、清原の固い決意をくつがえらせることはできない。

「あなたは決して夜会でへ出られぬ方だし、ご主人には迷惑をかけても、あなたには迷惑をかけんつもりだ」

ふともらした清原の言葉が朝子の胸を打つ。もし自分が夜会に出たら？

「もし私が生まれてはじめて、自分で立てた掟をやぶって、夜会に出たらどうなさいます」

「あなたが夜会に？ そんなことはありえないことだ」

「もし、と申しております。もし出ましたら軽蔑なさって？」

「そんなことは、あってはならんことだ」

「もし私が出ましたら、世間では手をたたいて笑うでしょう。私にとつてこれ以上の恥はございません。それでも私はとるべきものはとることができませんわ。西洋流に申しますと、宅の主催する今夜の夜会にも私が出るとすれば、それは宅の夜会というよりは、女主人の私の夜会、この朝子の夜会になるのでございますわ」

夜会に出るのは、政治のためではなく愛情のあかし、清原への贈り物だと朝子は説き、そのお返しとして、壮士の乱入をやめさせるよう求める。朝子の出現によって、外国人たちの嘲笑の的である舞踏会がまったく別の様相を呈す。夜会は清原にたいする朝子の愛のあかしの場となり、清原は抵抗運動家としてではなく、かつての恋人として決断を迫られる。

政治の論理ではなく、愛情の論理に追いつめられた清原は、とうとうその夜の計画を取りやめ、自分も鹿鳴館へは行かないことを約束する。

影山伯爵には、腹心の部下がいた。飛田天骨といい、殺人もいとわぬ冷徹無比の性格である。家出をした久雄は、飛田の家にころがりこんでいた。

壮士が乱入するという情報を飛田から手に入れた伯爵は、逆に、久雄を使って清原を暗殺する計画を立てる。父親にたいする息子の憎悪を利用し、自分は無傷のまま政敵を倒せるという魂胆であ

る。話を聞いた飛田は、暗殺は自分にまかせてくれるよう主張するが、伯爵は制して、

「あいつの目には殺意がある。これはなかなか得がたいことだ。それに比べればお前の目の中には、友禪の着物を喜ぶ女のような、血を見て喜ぶ趣味的なものが浮かんでいるにすぎない」

飛田は反論する。

「どんなに親を憎んでおっても、憎みきれいものでございませうか。憎しみのといだ刃の先も、いざ親の顔が目の前に迫れば、にぶる惧れはありはすまいか」

「骨肉の情愛というものは、一度その道を曲げられると、おそろしい憎悪に変わってしまう。理解の通わぬ親子の間柄、兄弟の間柄は他人よりも遠くなる。私は久雄の父親にたいする憎悪がよくわかる。実によくわかる」

と影山は言い、さらに、

「政治とは他人の憎悪を理解する能力なんだよ。この世を動かしている百千万の憎悪の歯車を利用して、それで世間を動かすことなんだよ。愛情なんぞに比べれば、憎悪のほうがずっと力強く人間を動かしているんだからね」

陰で話を聞いていた朝子は、思わず二人の前に飛び出して、
「その情報はまちがっております。今夜は決して壮士の乱入はございません」

影山はおどろきを隠しながら、

「おやおや、これは珍客のご入来だ」

「はい、立ち聞きをいたしております」

「めずらしいこともあればあるものだ。あなたは政治に興味をもちだしたのかい？ それならそれで私が、これからは政治の手引きをしてあげよう」

「でも今うかがったのは、政治のお話でも、一等はしたくないお話でしたわ」

影山は飛田をさがらせて、

「あなたは何か怒っているね。私と飛田の話のどこに、あなたを怒らせるようなものがあつただろうか」

「人を殺すとか何とかいうお話は、女を怖がらせることはできても、怒らせることはできませんわ。女が怒るのは裏切られた恋とか、やきもちとか、そんなことのほかにございません」

それから朝子は凜として、

「今夜、私は鹿鳴館の夜会に出ます」

「え？」

「作って下すったデコルテを着て、教えて下すったステップを踏んで、今夜、私は皆さんをあととおどろかせて上げますの。こんなふうには、殿様、こんなふうには、ワルツやポルカを上手に踊って、お高くとまった貴婦人方のお鼻を明かしてやりますの」

「デコルテ」とは、正式にはローブ・デコルテと言い、肩や背中を出し、裾が大きくひろがったドレスのことである。

朝子はさらに、

「今夜の鹿鳴館は夜会ではなくて、私がむかしお披露目をした新

橋のお座敷になりますの。踊れましてよ。私だって踊れましてよ。ほら、こんなに上手に。それに殿方の扱いにかけては、そこらの貴婦人方より私のほうが、ずっと年功を積んでおりますものね」

「おいおい、あなたも今はれっきとした貴婦人だということをお忘れてないよ」

「でもほかの貴婦人が気負い立って、日本のためやら政治のために、鹿鳴館へお出になるのに、私はただ色香を見せに出たかったのでございますわ。その機会がやっと来ました。永の年月の猫かぶりも、ただ今夜のためだったのでございますわ」

「やれやれ、あなたの方が私より、よっぽど念の入った陰謀家だ。それで壮士の乱入は……」

「私が夜会に出るので、壮士などは立ち入らせません」

壮士が乱入しなければ、清原を暗殺しようという久雄の役割もなくなる。朝子は、大徳寺侯爵の娘と久雄が愛しあっていることを話し、久雄の身柄を自分に預けてほしいと頼む。影山は、朝子の論理に苦笑しながらも、壮士の乱入がないことを条件として、それを承諾するのである。

三 息子の復讐

第三幕は、鹿鳴館の二階の一室、正面にはバルコニーがあり、

前庭へ降りることができる。秋晴れの一日、天長節も日が暮れつ

つある。

朝子は、今夜の夜会には顕子と一緒に出るよう久雄に命じ、顕子には久雄から一瞬たりとも目を離してはいけないと伝える。

朝子が始めてのドレスを着てあらわれた。その美しい姿に、大徳寺侯爵夫人も感嘆の声をあげる。

「本当にお似合い。今まで洋装もダンスもおきらいだと言って、私どもをだましていらしたのね。そんなに似合いになるじゃありませんか。おかげで今夜の夜会ではあなただけが引き立って、私どもはかすんでしまいます」

はじめてデコルテのドレスを着た朝子は、

「着物を着ればやさしい絹が脚にまといついてくれますのに、今は脚のまわりには心もとない風が吹くばかり」

影山伯爵も、はじめて見る朝子の洋装に目をみはるが、どうしても腑に落ちないことがあった。朝子はなぜあんなに久雄をかばうのか。清原をかばうのはわかるが、どうしてその息子の久雄を……。自問自答していた影山は、ある結論に突き当たる。久雄は朝子の子ではないのか。そのことを草乃に確認した伯爵は、朝子が夫の自分を利用して、久雄のいのちだけでなくその過去をのこらず救ってのけようと謀ったことに気づく。

暗い怒りが影山の胸中を駆けめぐる。そしてひそかに、まったく別の計画を立てることを思いつく。

影山は飛田を呼んで尋ねる。

「私がかねがね言う政治の要諦というやつは何だと思っ？」

「は？」

「政治の要諦はこうだ。いいかね。政治には真理というものはない。真理のないということを経営は知っておる。だから政治は真理の模造品を作らねばならんのだ」

「……はあ」

「今夜、お前の伝えて来たような事態は起こらない。そんな事態はもはや存在しない。しかし、ある事態がなくなったら、その事態を自分の手で作り出さねばならん。それが政治というものだ。政治の要諦というものだ、いいかね」

「御意にございます、御前」

「今夜はぜひとも壮士の乱入がなければならん。白鉢巻が彼らのうなじにひるがえり、花やかなシャンデリアのあたりを映して、ここに白刃がひらめかねばならん。清原は塀外にその馬車を止めなければならん。馬車は初冬の星空の下に、陰謀そのもののようにうずくまっていなければならん。私が歴史を作る。時の政府が歴史を作るのだ。誰もそれを変えてはならん。……とすると、飛田、お前はもうどうしたらいい？」

「今夜、ともかく壮士が乱入して、清原が参ればよろしいのでありましょう」

「そうだ」

伯爵のねらいを察した飛田は、そのとおりの手筈をととのえる。

一方、伯爵は草乃に命じて、清原がかけつけるよう算段する。つまり、清原の命令にそむいた壮士たちが乱入したという偽りの

知らせを持って行かせるのである。

さて、いよいよ鹿鳴館の夜会がはじまった。

第四幕は、午後九時すぎ、来客たちでにぎわう舞踏会の会場。

坂崎男爵夫妻や宮村大将夫妻の顔も見える。やがて総理大臣夫妻、イギリス副提督夫妻、清国大使、陸軍大臣夫妻ら、来賓がつきつきと姿をあらわす。

カドリールの曲が演奏され、人々が踊りはじめた。舞台からその奥にある舞踏場まで、ダンスの列が花やかにつづく。そのなかには、明日の旅立ちを約束した久雄と颯子の姿もあった。

そんな中を、給仕頭があたふたと、朝子をさがしてやって来る。

「何ですって？ 壮士が……いずれ二階へ上がってくる？ いい

え、そんなはずはありません。決してそんなはずは」

「一階では人々が逃げまどっています。抜き身の日本刀をふりまわして、おどかしては笑っているのです。一階の飾りつけも、どんどん壊されております」

「そんなはずがありません。そんなはずが」

「そうおっしゃるあいだに二階へ上がってまいります」

朝子はうろたえるが、すぐに姿勢を正して階段下に向かい、

「上がってきてはいけません。そこからこちらへ、一足でも上がってきてはいけませんよ。何です、その格好は。私が怖がるかとも思っているんですか。抜き身なんぞ怖くありません。さがりなさい。さあ、早くさがりなさい」

その間に、影山はひそかに飛田に合図をし、壮士のニセ者たちを退散させる。

久雄は、自分ばかりか母の朝子までを裏切った清原の仕打ちに憤り、バルコニーから飛び出して行く。

ようやくその場が静まったとき、外で数発、ピストルの音。

「久雄は、久雄は……」

と探しまわる朝子に、バルコニーの方から人影が近づいてくる。しかし、それは久雄ではなく、亡霊のような清原永之介であった。さっきのピストルで殺されたのは、清原ではなく久雄だった。朝子は愕然とする。

「あなたは約束をお破りになった。はじめから私をおだましになった。守るつもりのない約束をなされたのね。二十年たって、今やっとわかりましたわ。あなたは愛する値打ちのない方です」

「私にも言うだけのこととは言わせて下さい。馬車から下りようとした私を、いきなり物陰からピストルで射った者がある。弾丸は私をそれで、馬車の天蓋に当たった。私はすぐさま護身用のピストルでくせ者を射った。急所に当たったらしく、くせ者はその場に倒れた。街灯のあかりの下で、はじめてその顔が見えた。久雄だったのだ」

乱入したのは自由党の残党ではなかった、ニセの壮士を乱入させ、自分を呼び寄せたのは、ほかならぬ朝子の夫・影山伯爵だった、と清原は説明する。

しかし、撃たれた久雄のいのちはもう還らない。

「久雄は私に抱かれて息を引き取った。その表情を見たときに、朝子さん、私は直感したんだ。すべてを了解したんだ、わかりますか。久雄は私を殺そうとしたんじゃない。久雄は私に殺されたかったんだ。それがあいつの復讐だったんだ」

「え？」

「あんなに近い距離で、私をねらった弾丸が、あんなふうにあるものではない。わかりますか。あいつは私をねらう弾丸をそらして、私に殺されたかったんだ。あいつの憎んでいる親父に。あいつの愛にととう報いなかった不甲斐ない親父に。……私にはわかったのだ。あいつはこの私から、何一つ親父らしいものを得られなかったから、最後に親父のピストルの弾丸を望んだのだ。そして私に生涯つづく後悔を与えようと企んだのだ。私が朝も夕べも忘れられなくなるように仕組んだのだ」

もはや理想を失い、政治家としての生命も断たれたと感じた清原は、朝子の前から永遠に去って行く。

四 死の舞踏

誇りを踏みにじられた悔しさ、息子を失った悲しみ、夫に裏切られた憤り、愛する者を疑った愚かさ……。波打つドレスの裾のような感情に翻弄されながらも、朝子はいつもの冷静さを取りもどして、夫の影山伯爵に向かう。

「あなたのなさったことをよく考えてみました。政治、政治、政治、みんな政治の問題にすぎませんのね。それなら、あなたをお責めするには及びませんわ」

「政治、政治、政治かね。しかし私のしたことを、この私がかきりあなたに、愛情の問題だと断言したらどうなるんだ。この事件は愛情の惹き起こした事件だとは言えないかね。私は、……嫉ましかったんだ」

「あなたが！」

「まあ、聞きなさい。私はね、あなたと清原の間にある、あの何とも言えない信頼が嫉ましかったんだ。あの透明な、あの余人を容れない、あの物言わぬ信頼が嫉ましかったんだ。あんなに永いこと離れていながら、あなたと清原は信じあうことができたんだ。わたしとあなたの間には、そんなものかけらでもあったかね」

「ごさいませんでしたわ。でも、あなたがそんなものがお嫌いだから、わたしもそれに従ったまででございます」

影山伯爵の言葉は、どこまでが真実なのか。もし、その言葉どおり、今度の事件が「嫉妬」から起こされたものであるなら、政治の世界も、結局は個人の感情に支配されるということになる。政治には「真理」はなく、政治はその「模造品」を作る。それが「政治の要諦」だと言いつつ影山伯爵の、模造品を作り出す政治的行為は、感情という真理によってつき動かされていたのであろうか。

その生涯を通して「理想」という大義に従ったはずの清原が、

たとえみずからの手になる結果だとしても、息子の死によって、突然、政治的生命を断られたと感じることに疑問が残る。「理想」に従って生きるとは、親子の感情さえ超えた、もっと非情な世界のことではないのか。

見方を変えれば、「政治」といい「大義」と言っても、人の生きる根本のところは、親と子、夫と妻、人と人といった具体的な人間関係によって左右されると、作者は言いたかったのかもしれない。あるいは、文学という営みが、そういう世界にこそ目を向け描くということなのだとと言えるだろう。

朝子は、人間の愛情を持ち出す夫を、

「そんな言葉は不潔です。あなたのお口から出るとけがらわしい。あなたは人間の感情からすっかり離れているときだけ、氷のように清潔なんです」

と非難するが、夫の影山はしかし、

「今あなたの心がしゃべっている。怒りと嘆きの満ち潮のなかで、あなたの心がしゃべっている。あなたは心というものが、自分一人にしか備わっていないと思っっている」

と反論する。

「結婚以来、今はじめて、あなたは正直な私を知らんになっていらっしゃるのね」

「この結婚はあなたにとっては政治だったというわけだね」

「そう申しましょう。お似合いの夫婦でございましたわ。実に似合いの。……でも良いことは永く続きませぬのね。今日かぎり、

おいとまをいただきます」

「ほう、そうしてどこへ行くのだね」

「清原さんについてまいります」

「死人との結婚は愉快だろうね」

「巧くやって行けますわ。死人との結婚……。私ほどそれに馴れていて、経験のある女がございましょうか」

舞踏場から、ふたたび音楽が流れはじめた。

「やれやれ、またダンスがはじまった」

「息子の喪中に母親がワルツを踊るのでございますね」

「そうだ、微笑んで」

二人が偽りの手をとって踊りはじめると、同じように踊る人たちが登場し、しばらくダンスがつづき、そして一瞬のポーズがあり、遠くで銃声が響く。

「おや、ピストルの音が」

「耳のせいだよ。それとも花火だ。そうだ。打ち上げそこねたお祝いの花火だ」

影山伯爵の指図により清原が撃たれたことを暗示しつつ、幕が降りる。

『鹿鳴館』は文学座の杉村春子を主演に予定して書かれた。初演の配役はほかに、影山伯爵に中村伸郎、清原に北村和夫、久雄は仲谷昇、頸子は丹阿弥谷津子であった。

三島由紀夫は、文学座のいわば座付き作者として、多くの作品

を書いたが、昭和三十八年（一九六三）の『喜びの琴』上演拒否の事件により、文学座を離れることになる。以後、作者から『鹿鳴館』の上演許可は降りず、杉村春子の当たり役だった朝子は、初代の水谷八重子、佐久間良子が他の舞台で、市川崑監督による映画では浅丘ルリ子が演じ、最近では劇団四季も公演している。なかでは水谷八重子が、その美しい容姿と独特の台詞まわしで、『新派大悲劇』調の『鹿鳴館』のヒロイン・朝子には打ってつけで好評を博した。

『喜びの琴』は、若く純朴な公安係の巡査が、尊敬し信じてもいた上司の巡査部長に裏切られるというストーリーである。反左翼思想を吹き込んだ上司が、じつはその政党の秘密黨員であり、自分はその道具にすぎなかったと知ったときの絶望と孤独。「喜びの琴」は、そんな青年の耳に空中から聞こえてくる。天からまっすぐ落ちてくるその琴の音は、しかし自分一人にしか聞こえない。問題とされたのは、左翼政党や列車転覆事故のモデルが容易に指摘でき、思想的な偏向があるということだった。最後にどんな返しがあるのは、三島由紀夫の戯曲の定番で、『鹿鳴館』もその例にもれない。

文学座は会議を重ね、結局、翌年の正月公演を中止した。三島由紀夫は昭和三十九年（一九六四年）二月号の『文芸』にこの戯曲を発表し、前書きに「イデオロギーは本質的に相対的なものだ、というのは私の固い信念であり、だからこそ芸術の存在理由があるのだ、というのも私の固い信念である」と書いている。

その後、数年のうちに、三島由紀夫の発言はいちじるしく政治的色彩を帯び、芸術が政治に侵潤されてゆくように見える。そして、先にも書いたとおり、自衛隊市ヶ谷駐屯地に楯の会会員四名とともに乱入、そのうちの一人・森田必勝とともに自刃するという結果になった。それは、芸術という絶対の世界が政治という力によって相対化され、侵食された結末であろうか。それとも、『鹿鳴館』のなかの影山伯爵の台詞にもあるように、三島由紀夫の政治的行動もまた、根本は人間的な感情に動かされていたと見るべきなのであろうか。

(二〇〇六年九月)